

「ウォーリック」の意味するもの

— 「熊」についての一考察（2） —

井 上 勝

Anyway he [Hubert Fitz-Hubert Beauchamp]
called it Warwick — Isaac McCaslin.

I

『紀要』第14号において、私は「フォークナーはアメリカ人か」というタイトルを掲げて、「熊」(“The Bear”, *Go Down, Moses*, 1942)の世界へ、というよりもウィリアム・フォークナー(William Faulkner, 1897-1962)の世界への一歩を進めようとしてみた。それは、「熊」の第4章にこの拙論のエピグラフとしてもその一部を記した「『とにかく彼〔ヒューバート・フィッツ=ヒューバート・ビーチャム〕はそこをウォーリックと呼んだ』、たとえそれ以上ではなかったとしても、少なくとも一度は」(“Anyway he called it Warwick”: once at least, even if no more.)⁽¹⁾という言葉があったからである。そしてもう一つには、わが国における最初のフォークナー研究誌『ウィリアム・フォークナー〔資料・批評・研究〕』創刊号に寄せられた「“Was”について」において、「その他の目につく変更としては、Hubert はかつて Mr. Jason であったものが変更されたものであるし、彼の屋敷の名は、Primrose から Warwick といかにももともと

らしい名前に変えられている」⁽²⁾という指摘があったからでもある。

前者について言えば、たとえばマイケル・ミルゲイト(Michael Millgate)が指摘しているように、『行け、モーセ』があくまで「白い(肌の)黒人の血縁関係」(white-Negro relationships)⁽³⁾、さらには「荒野の崩壊」(the destruction of the wilderness)⁽⁴⁾を扱った作品であれば、アイザック・マッキャスリン(Isaac McCaslin)のその言葉はそれ程重要視しうるものではないかも知れない。また、後者について言えば、『行け、モーセ』の一編としての“Was”の成立過程をめぐっての詳細な調査・研究において、あくまで一つの変更事項として留意しているにすぎないのであるから、それは取り立てて言うべきことではないかも知れない。したがって、私がとくに「『とにかく彼はそこをウォーリックと呼んだ』」というアイザックの言葉、さらにはそれに続く「たとえそれ以上ではなかったとしても、少なくとも一度は。」という件りに留意しつつ、「熊」についての一つの解釈を試みようとするにはあるいは単に重箱の隅をつついていくだけのことになるかも知れない。しかし、それでも私にとって、「熊」のさらに意味しているであろうことを考えていくにあたっては“Warwick”を一つの手懸りとするには重要なことであるように思える。

たしかに、『行け、モーセ』は、そしてまたその頂点に位置している「熊」は「黒人と白人」の関係、もしくは黒人と白人の長い関わりのなかから生じた「白い(肌の)黒人の血縁関係」を扱った作品であり、さらには「荒野の崩壊」の意味を問うた作品である。しかしながら、「ヨクナパトゥファ・サーガ」(the Yoknapatawpha saga)と言われるフォークナーの一連の作品との関連において考えてみると、違った角度から読み進めていくことも可能であるように思える。その違った角度とはアイデンティティーの問題を軸にして考えてみるということである。それは、「アメリカ人」とは何か、について問うことである。あるいは、フォークナーにとっての「アメリカ人」とはどのようなあらねばならなかったのかについて問うてみることである。

アメリカ大陸が「旧世界の無価値な黄昏からの解放と自由の避難所であり聖

域として捧げられた希望に満ちた全大陸」(whole hopeful continent dedicated as a refuge and sanctuary of liberty and freedom from what you called the old world's worthless evening)⁽⁵⁾である「新しい土地」(the new land)であるのであれば、アイデンティティーの問題を考えると、「アメリカ人」とアメリカの大地との関わりがどのような意味を孕んでいるのかが問題になってくるはずである。そしてもし「アメリカ人」とアメリカの大地との関係が問題になってくるとすれば、ビーチャム家の屋敷の名前が Primrose からもっともらしい名前 Warwick に変更されていることにも単なる変更ということ以上の意味が付与されているはずである。なぜならば、後で詳しく指摘するつもりであるが、その屋敷の名前、Warwick とはヒューバートの妹でやがてアイザックの母親となるミス・ソフォンシバ(Miss Sophonsiba)がイギリスにある屋敷の名前にちなんでそのように呼ばせようとしていることとの関連において意味を持つからである⁽⁶⁾。

仮りに、ビーチャム家の屋敷を Warwick と呼び、他の人にもそのように呼ばせようとしているのがミス・ソフォンシバの単なる一人相撲でしかなかったならば、アイザックにとって、そのことはあるいは彼が生まれる以前の時代における一人の人間の戯れ言として片付けてしまいうるものであったかも知れない。だが、それは単なる戯れ言として片付けてしまいうるものではなかった。

「『とにかく彼はそこをウォーリックと呼んだ』(傍点は筆者)と、さらには「たとえそれ以上ではなかったとしても、少なくとも一度は」(傍点は筆者)と「熊」において明らかにされているように、ヒューバートもミス・ソフォンシバと同じように、しかし彼女のようにあからさまにではなく、おそらく心のどこかで彼の屋敷を Warwick と呼び続けていたにちがいないのであり、だからこそヒューバートはマッキャスリン家の「〔土地〕台帳」(the ledger)に彼が金を借りたことを書き記したあとで「ウォーリックにて1867年11月27日」(at Warwick 27 Nov 1867)⁽⁷⁾と書き加えているのである。伯父のヒューバートもまた彼ら自身の屋敷を Warwick と呼んでいたということは先に指摘したそれを発見したとき

のアイザックの言葉からも推察できるように、彼アイザックにとっては少なからぬ衝撃であったのである。

「旧世界の無価値な黄昏からの解放と自由の避難所であり聖域として捧げられた」アメリカにあっても、少なくともビーチャム家の人は「旧世界」との関係において自らを位置づけようとしている。ヒューバートとミス・ソフォンシバが彼らの屋敷の名前をイギリスにある屋敷の名前にちなんで Warwick としていることがそれを如実に物語っている。そして彼らが自分たちの屋敷を Warwick と呼び続けているのであれば、彼らの根底にあるものは、「新しい土地」アメリカにあってそのアメリカとの密接な関係を打ち立てようとする意識ではなくて、アメリカにあってもなお「旧世界」との、具体的にはイギリスとの関係にすがって生きていこうとする意識であるということになる。そこには自立する、もしくは自立しようとする「アメリカ人」としての意識はない。それは、繰り返して言えば、南北戦争前夜のことであり、そうであれば、遠い昔のこととして片付けられうることであるかも知れないが、しかしまた視点を変えて見れば、それはアメリカの独立から百年近くも過ぎたあとのことでもあり、簡単に片付けてしまいうるものではないのだ。少なくともアイザックにとってはそうである。

したがって、ビーチャム家の屋敷の名前が Primrose からもっともらしい名前 Warwick に変更されているのは、イギリスとの、つまりは「旧世界」との関係をより一層具体的に明示するための意図が含まれていたと理解していいだろう。ミス・ソフォンシバが執拗に自らの屋敷を Warwick と呼び、他の人にもそのように呼ばせようとし、さらにはおそらくヒューバートもまた心のどこかでそのように呼び続けていたにちがいないということ、そしてそのことがアイザックに少なからぬ衝撃を与えたということは「アメリカ人」としての自立の問題、すなわち「アメリカ人」のアイデンティティーの問題を考えていくうえにおいては重要な意味を持つと理解していいはずである。

それならば、アメリカの Warwick とはどういうところであろうか。この問題

について考えるためには、まず“Was”のなかにその手懸りを求めなければならぬ。

II

「アイクおじさん」すなわちアイザック・マッキャスリンは、70歳を過ぎ、自分がもはや確証しえないほどに80歳に近づいており、今は男やもめであり郡の半分の人たちにとってはおじであり誰にたいしても父親ではない

Isaac McCaslin, 'Uncle Ike', past seventy and nearer eighty than he ever corroborated any more, a widower now and uncle to half a county and father to no one⁽⁸⁾

という書き出しで、“Was”は、そしてその第1章は始まっている。冒頭の一部をということで仮りに上記のように引き写してみたのだが、実はこの文章はここで終わっているのではない。ピリオドはなく、次のパラグラフ（インデントしてあるのでそう呼んでもいいだろう）が「小文字」で始められ、さらに続けられているのである。

この第1章では、まるで一息、息を入れるためでもあるかのように、ピリオドは途中で一度用いられているだけであり、章の終わりにもない。章の終わりにもピリオドがないということは第1章が「この一章は、僅か四百余字の極めて短いものでありながら、一語の無駄もない簡潔さで、“Was”が、*Go Down, Moses* 全体のコンテクストで理解されるに必要なことはすべて書き込んである。」⁽⁹⁾と指摘されていることから明らかであるように、“Was”の第2章以下を包み込んでいるのは当然のこととして、「熊」とも密接に関連していることを意味している。さらに言えば、第1章の結末にピリオドがないということはこの1章の、ひいては“Was”の時間が一物語の時間の枠組を越えうるということを示唆していると言っていいだろう。そればかりではない。この第1章において、いま

や80歳になんなんとする70歳過ぎの老人という形でアイザック・マッキャスリンの年齢を設定することによって、限りある人間の生のなかにあつて、より具体的にどれほど長い時間の経過があつたのかを示し、また彼が自分の年齢を定かにはしえないとしてその具体性をぼかすことによって、可能な限りどこまでも溯行あるいは延長しうる時間の奥行きを示し、その文体と連動させているとっていいだろう。言い換えれば、“Was”の第1章以降の『行け、モーセ』全体の時間もすべてはこの第1章に収斂されることを、第1章以下で語られるすべての事柄はアイザックに収斂されるということになるであろう。アイザックが郡の誰にたいしても父親ではないが、半分の人たちにとってはおじであるというのもこの意味においてである。つまり、アイザックはこの郡のほとんどすべての事柄と直接にあるいは間接に関わりあっているということだ。

こういう枠組のなかでまず“Was”の第2章以下が語られていく。そして、第2章以下で語られる“Was”の世界とは、アイザックにとっては、彼の父親の妹の孫である1850年生まれの彼よりも16歳も年長で彼の父親の役割をも担っているマッキャスリン・エドモンズ(McCaslin Edmonds)が関係し、見た世界であり、彼アイザックがマッキャスリンを通して聞かせてもらい、耳を傾けてきた世界である。

マッキャスリン・エドモンズがまだ幼い子供であつた頃、マッキャスリン家の黒人奴隷トーミーのタール(Tomey's Turl)はビーチャム家の同じく黒人奴隷で彼の恋人であるテニー(Tennie)に会うために「年に2度前後」(about twice a year)⁽¹⁰⁾は逃亡を企てるのであつた。「年に2度前後」ということであるから、事の次第のわかっているマッキャスリン家の双児の兄弟、バックおじさん(Uncle Buck)、バディおじさん(Uncle Buddy)と呼ばれるセオフィラス(Theophilus)とアモーディアス(Amodeus)のうちバックおじさんと幼いマッキャスリンはすぐに彼を連れ戻しに行かなければならない。でなければ、トーミーのタールがビーチャム家に行き着く前に彼を捕えなければならぬ。行き着く前に捕えることができなければ、ビーチャム家の屋敷で手順にのっとり、犬に追わせて彼を

捕えて戻ってくるのである。それというのも、彼らが連れ戻しに行かなければ、ヒューバートとミス・ソフォンシバが二人でトーミーのタールを彼らの家へ連れて来て、一週間かそれ以上滞在していくからである。トーミーのタールが逃亡を企てるのは「年に2度前後」であるということであるから、彼が逃亡するのも、バックおじさんとマッキャスリンが連れだって連れ戻しに行くのもどうやら年中行事となっている。

トーミーのタールとテニーとは黒人奴隷であり、したがってその是非は問わぬとしても彼らの動産であるのだから、逃亡・追跡の年中行事をやめたければ、売買によって、マッキャスリン家かビーチャム家のどちらかに住まわせてもいいのだが、もはや経済的に余裕のないいずれの側もそれができずにいる。さらには、双児の父ルーシャス・クィンタス・キャロザーズ・マッキャスリン(Lucius Quintus Carothers McCaslin)が奴隷のユーニス(Eunice)にトマシーナ(Tomasina)という女の子を産ませ、そのトマシーナとの近親相姦によって産ませた子がトーミーのタールであり、彼が「白い(肌の)腹ちがいのマッキャスリン」(white half-McCaslin)⁽¹¹⁾でもあることから、どんな条件(例えば、彼を無償で譲り、食いぶちをあてがうということ)があってもヒューバートは彼を自分の屋敷には住まわせたがらないということも手伝って、トーミーのタールとテニーとは一緒に住むことができないのである。そのために、彼らは一方は逃亡を企て、他方は追跡するという年中行事を繰り返さざるをえないのである。

そして、トーミーのタールは、黒人であるが故に、正確には混血の「白い(肌の)黒人」であるが故に、「腹違い」の兄弟たちによって追われ、時として犬を放たれるのである。“Was”においては、こういう年中行事を繰り返したのち、最終的にはヒューバートとバディーおじさんのポーカーの勝負によってトーミーのタールの行く末が決められるということになっている。またその同じ勝負によって、ミス・ソフォンシバとバックおじさんの結婚も決められてしまうことになっている。この結婚に至るまでの経緯も“Was”あるいは『行け、モーセ』について考えるにあたっては重要なことではあるけれども、ここではトーミー

のタールのことに関して深く言及しないのと同じように、ただその結婚がポーカーの勝負によって決められたということを指摘するにとどめておきたい。

テニーがビーチャム家の奴隷であれば、トーミーのタールの逃亡の目的は彼女に会うためであるのだから、彼がときにはバックおじさんたちの追跡を振り切って逃げ込む先はビーチャム家の屋敷である。また何としても彼を捕えて連れ戻さなければならないバックおじさんたちが彼を獲物として犬を放つのも当然ビーチャム家の屋敷においてである。

私がここで問いたいのは、トーミーのタールがマッキャスリン家の双児の兄弟とは「腹違い」の兄弟ではあっても奴隷であるが故に、彼らによって犬を放たれているその屋敷がなぜイギリスにある屋敷の名前にちなんで Warwick と呼ばれているのかということである。フォークナーはなぜ Warwick と呼ばれているところを奴隷を獲物として犬を放つ場と設定したかということである。やがてバックおじさんと結婚してアイザックの母親となるミス・ソフォンシバはあからさまにそこを Warwick と呼び、他の人にもそのように呼ばせようとしているということである。それならば、いったいなぜビーチャム家の屋敷が少なくともミス・ソフォンシバによって Warwick と呼ばれているということが問題になるのか。次の2つの引用を手懸りにして考えてみたい。

彼〔トーミーのタール〕は隣の郡のはずれをちよつとといったところにあるヒューバート・ビーチャムさんの屋敷に向かっていた、そこはヒューバートさんの妹のミス・ソフォンシバ——（中略）——がまだみんなにイギリスにある屋敷の名前にちなんでウォーリックと呼ばせようとしているところであり、彼女が言うにはヒューバートさんはそこの本当の伯爵であり、ただし彼は労を惜しまずに彼の正当な権利を確立するための、気力は言うまでもなく、十分な誇りを持ちあわせていないだけである。

He was heading for Mr Hubert Beauchamp's place just over the edge of the next county, that Mr Hubert's sister, Miss Sophonsiba (Mr Hubert

was a bachelor too, like Uncle Buck and Uncle Buddy) was still trying to make people call Warwick after the place in England that she said Mr Hubert was probably the true earl of only he never even had enough pride, not to mention energy, to take the trouble to establish his just rights.⁽¹²⁾

少年がまだ門柱に座って、角笛を吹いていた — そこには門と呼びうるものはなかった、ただ二本の柱があるだけで、彼〔マッキヤスリン・エドモンズ〕と同じくらいの大きさの黒人の少年がその柱の一本に座って、狐用の角笛を吹いているのであった、ここが、ミス・ソフォンシバがそう呼んでもらおうとしていることであることをみんながすでに知って長いことたっていたときでさえ、まだみんなに名前はウォーリックであることを思い出させようとしているところであり、ついにはみんながそこをウォーリックと呼ぼうとしないとき、彼女はみんなの話していることがわかっていさえしないようであり、そのためにあたかも彼女とヒューバートさんが一方を他方の上にして同じ区域の土地に別々の二つの農園を所有しているように思えたところである。

The boy was still sitting on the gatepost, blowing the horn — there was not gate there ; just two posts and a nigger boy about his size sitting on one of them, blowing a fox-horn ; this was what Miss Sophonsiba was still reminding people was named Warwick even when they had already known for a long time that's what she aimed to have it called, untill when they wouldn't call it Warwick she wouldn't even seem to know what they were talking about and it would sound as if she and Mr Hubert owned two separate plantations covering the same area of ground, one on top of the other.⁽¹³⁾

ミス・ソフォンシバは自分たちの屋敷を Warwick と呼び、他の人たちにもそ

のように呼ばせようとしている。その態度は徹底していて、他の人たちがそこを Warwick と呼ぼうとしなければ、彼らの態度を無視し、会話が混乱しようともそんなことはいっこうに意に介さない。それは彼女の兄ヒューバートがイギリスの本当のウォーリック伯爵であるからだという。だが、それが事実であるのかどうかを明らかにする個所はどこにも書かれていない。フォークナーは書かずに曖昧なままにしてある。強いて言えば、彼女が自分たちの屋敷を Warwick と呼ばせようとしているのが彼女の狙いであるということが私たちが理解する根拠となるかも知れない。そうであれば、彼女の主張していることはどこにも根拠のない単なる戯れ言でしかないということになる。しかし、ただはっきりしているのは、彼女の兄が本当のウォーリック伯爵であるのかどうかはともかくとしても、他の人たちが自分たちの屋敷へ来るときに「『ようこそウォーリックへ』」(“Welcome to Warwick”)⁽¹⁴⁾と言って迎えていることから明らかであるように、彼女がかたくなに自分たちの屋敷を Warwick と呼び続け、他の人たちにもそれを納得させようとしていることである。そして、そのことによって、Warwick という屋敷名が一つの事実性を獲得しているということである。それは、おそらく彼女の兄がその本当の伯爵であるイギリスの屋敷が Warwick であるというそれだけの根拠に基づくものである。その真偽のほどはもはや問わぬとして、彼女の言葉は自分たちの屋敷の名前が Warwick であるという事実を確立し、彼女の意識が自らが住んでいるアメリカにたいしてではなく、Warwick に、イギリスにつまりは「旧世界」に向けられているということを意味している。言い換えれば、少なくともミス・ソフォンシバは確実に身はアメリカにありながら、心はイギリスに置いているということである。

アメリカが、「熊」においてアイザックが言っているように、「旧世界」の価値概念を否定し、その「旧世界」からの人間の「解放と自由」のために捧げられた地としての役割を果していかなければならない場であるとすれば、そこは「旧世界」とのあらゆる関係を断ち切った場となっていなければならない。し

かし、実際には、ミス・ソフォンシバはアメリカにあっても「旧世界」との関係を通ち切ろうとはしていない。それどころか、逆に「旧世界」との関係を維持しようとさえしている。あるいは、「旧世界」との関係が密接であることを主張することによって、自らの幻想を事実として捉え、それにすがって生きていこうとしている。

ミス・ソフォンシバが他の人たちにも何とかして自分たちの屋敷を Warwick と呼ばせようと努力しているということからすれば、彼ら他の人たちはビーチャム家の屋敷が Warwick であろうがなかろうが、ヒューバートがウォーリック伯爵であろうがなかろうが、それを問題とはしていないということになる。しかし、たしかに問題にはしていないけれども、さりとてそれを否定しているのでもない。だからこそ、ミス・ソフォンシバは自分たちの屋敷を Warwick と呼び続けようるのである。彼ら他の人たちは、彼女がそこを Warwick と呼ばせようとしているだけだと知って、彼女の言葉を無視している。無視することが否定することであれば、他の人たちはその屋敷の名前が Warwick であることを、ヒューバートがおそらくは本当のウォーリック伯爵であることを否定していることにもなる。しかし、この場合、みんなの無視にもかかわらず、相も変わらずミス・ソフォンシバはみんなの前で自分たちの屋敷を Warwick と呼び続けているのであるから、無視することは必ずしも否定することであるということにはならない。というよりはむしろ容認していると言った方がよい。他の人たちが無視というかたちで容認しているからこそ、彼女はみんなの前でいつも平然と自分たちの屋敷を Warwick と呼び続けえたのである。その結果、彼女は、「あたかも彼女とヒューバートさんが一方を他方の上にして同じ区域の土地に別々の二つの農園を所有している」かのように、みんなに、少なくとも少年マッキャスリンに思わせているのである。

そして、もし他の人たちがミス・ソフォンシバの言う Warwick を容認しているのであれば、彼らにもまた Warwick を心のどこかで認める要因があるということになる。もしこの指摘が正しいとすれば、ビーチャム家の屋敷を

Warwick と呼ぶのか呼ばないのかという問題は、ただ単にビーチャム家の屋敷が、あるいはヒューバートがイギリスの Warwick と関係があるのかないのかという問題を越えて、南北戦争前夜のアメリカ人の意識がどうであったかという問題になってくるだろう。この問題について考えるためには、ヒューバートが一つの手懸りとなる。“Was”においては、ヒューバートが自分の屋敷を Warwick と呼んだということはどこにも書かれていない。けれども、「熊」において、アイザックが「台帳」を通して知ったことから明らかであるように、彼ヒューバートもまた、たとえ一度でしかなかったとしても、とにかく自分たちの屋敷を Warwick と呼んだのである。ということは、彼もまたそこを Warwick と呼んだということと同じ意味において、自分のことをウォーリック伯爵であると思っていたということになる。先にも指摘したように、“Was”においては、ヒューバートが自分の屋敷を Warwick と呼んだということはどこにも書かれていない。であるとすれば、ヒューバートは他の人たちと同じような態度でミス・ソフォンシバに対応していたということが推測される。そのヒューバートが自分の屋敷を少なくとも一度は（あるいはそれ以上であったかも知れないということにもなるが）Warwick と呼んだとなれば、他の人たちもまたミス・ソフォンシバの言う Warwick の意味するものを積極的にではなかったとしても認めていたということになる。彼らの意識もまたミス・ソフォンシバのそれと等質のものであったということになるであろう。ミス・ソフォンシバの言う Warwick とはアメリカにありながらも、アメリカの土地ではない。アメリカの土地ではなくて、イギリスの土地である。「旧世界」の土地である。少年マッキャスリンが「一方を他方の上にして同じ区域の土地に別々の二つの農園」として鋭く感じとったように、アメリカの Warwick とは奇妙な二重性を持ちあわせた土地である。この不可思議な二重性こそ、アメリカの孕む矛盾であるということになるかも知れない。このことが明らかになるのは「熊」との関係においてである。

アメリカの Warwick とは二つの長い引用からも明らかであるように、「屋

敷」と呼ぶにはあまりにも粗末な屋敷である。「門」と呼ぶに相応しい門はなく、ただ2本の柱が立っているにすぎない。家の中でも用心して歩かなければ、腐った床板を踏みこわしてしまいそうなたたずまいである⁽¹⁵⁾。そこにおいて、「最も古いスポーツの一つ」(one of the most ancient of sports)⁽¹⁶⁾である狩猟が黒人奴隷を獲物として行なわれているのである。

すでにこのような話をマッキヤスリン・エドモンズを通して聞き知っていたアイザックであるが故に、「熊」において彼がアメリカの大地との関係から自らの拠って立つ場を確立しえたときに、すなわちアメリカの大地との関係において自立する「アメリカ人」としての有り様を見出したときに、「『とにかく彼〔ヒューバート〕はそこをウォーリックと呼んだ』」と言うとき、その言葉は「たとえそれ以上ではなかったとしても、少なくとも一度は」という件りに補強されて、「熊」を理解するうえでの重要な鍵となってくるのである。マッキヤスリンの語ってくれた話のなかでは、ただミス・ソフォンシバだけがヒューバートの屋敷を Warwick と呼び、ヒューバートをも含めて彼女以外の人たちは誰もそこを Warwick と呼ぶ者はなかった。にもかかわらず、「台帳」を見たとき、ヒューバートもまた自分の屋敷を Warwick と呼んでいたことが明らかになったのである。ヒューバートが「ウォーリックにて1867年11月27日」と「台帳」に書き記したのを見出したアイザックの内部では、それは「台帳」に記された単なる一記載事項ではなくなったのである。その記載事項から、彼アイザックは少なくとも彼が生まれたときあたりまで、同胞のアメリカ人たちは「アメリカ人」として自立していなかったということを知ったのである。アメリカの Warwick の持つ奇妙な二重性がそれを見事に物語っている。

アイザックが、彼の伯父が自分の屋敷を少なくとも一度は Warwick と呼んだということを知って、衝撃を受けたということ、その衝撃の意味を理解するためには、「熊」の世界を、つまりまだその当時までは残っていたアメリカの大森林における彼の体験の意味を探っていかなければならないのであるが、それについてはいくらか『紀要』第14号において明らかにしたつもりである。し

かしまだそこにおいては、なぜ“熊”が「オールド・ベン」(Old Ben)と呼ばれているのか、なぜ「オールド・ベン」を倒したものが人間なら混血であり、動物なら雑種であるのかについては問わなかった。それらについてはいずれ問わなければならない。

註

- 1 William Faulkner, *Go Down, Moses*, p. 307.
- 2 大橋健三郎・原川恭一編、『ウィリアム・フォークナー』1巻1号, p. 32.
- 3 Michael Millgate, *The Achievement of William Faulkner*, p. 204.
- 4 *Loc. cit.*
- 5 William Faulkner, *Go Down, Moses*, p. 283.
- 6 このことについては註の12で具体的に示してある。
- 7 William Faulkner, *Go Down, Moses*, p. 307.
- 8 *Ibid.*, p. 3
- 9 大橋健三郎・原川恭一編, 前掲書, p. 30.
- 10 William Faulkner, *Go Down, Moses*, p. 5.
- 11 *Ibid.*, p. 6.
- 12 *Ibid.*, p. 5.
- 13 *Ibid.*, p. 9.
- 14 *Ibid.*, p. 11.
- 15 *Ibid.*, p. 10. They went to the house, crossing the back gallery, Mr Hubert warning them again, as he always did, to watch out for the rotted floor-board he hadn't got around to have fixed yet.
- 16 F. L. Utley, L. Z. Bloom & A. F. Kinney (eds.), *Bear, Man, and God : Eight Approaches to William Faulkner's "The Bear"*, p. 168.

「ウォーリック」の意味するもの

テキスト

- Faulkner, William, *Go Down, Moses*, New York : Random House, 1942.

参考書

- Millgate, M., *The Achievement of William Faulkner*, New York : Random House, 1966.
- Utley, F. L., Bloom, L. Z. & Kinney, A. F. (eds.), *Bear, Man, and God : Eight Approaches to William Faulkner's "The Bear"*, New York : Random House, 1971.
- 大橋健三郎・原川恭一編『ウィリアム・フォークナー〔資料・批評・研究〕』1巻1号, 南雲堂, (昭. 53)